

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第954号	氏名	丸山真弘
論文審査担当者	主査 田中榮司 副査 角谷眞澄・駒津光久		

### (論文審査の結果の要旨)

自己免疫性膵炎（以下 AIP）は、従来は急性期の病態として捉えられていたが、長期経過で膵石灰化を来すことが報告され、通常の慢性膵炎に移行しうる可能性も示唆されてきた。AIP における膵石形成の危険因子や機序に関しては不明である。そこで丸山らは、AIP の長期経過における膵石形成機序として、1) 膵炎発作後の、膵実質に対する本症特有の障害や高度な炎症性組織障害や膵壊死、2) 膵管狭窄の後遺的变化による膵液うっ滞の 2 つの可能性を想定し、信大病院消化器内科で 3 年以上経過観察が可能であった AIP69 例を対象に、膵石形成群と非形成群の 2 群に分け、後向きに患者背景、血液検査、画像検査を比較検討した。

その結果、丸山らは以下の結果を得た。

- 1) AIP69 例の長期経過で、a) 膵石の新規出現は 20 例、b) 診断時に膵石を認め経過で増加・増大は 8 例、c) 診断時に膵石を認め経過で変化なしは 9 例であり、本症は長期経過で膵石形成する病態と考えられた。
- 2) 患者背景において、観察期間およびアルコール摂取は膵石形成と関連していなかった。有意差はないが、再燃は膵石形成と関連性が示唆された。
- 3) 血液検査において、AIP の活動性マーカーと考えられる項目（IgG、IgG4、C3、C4、sIL2-R）は膵石形成と関連性はなく、本症特有の活動性・炎症の程度と膵石形成との関連性は確認できなかった。
- 4) 画像検査において、膵石形成の危険因子として、単変量解析にて診断時の①膵頭部腫大、②膵頭部の Wirsung 管と Santorini 管の両者狭細が同定され、多変量解析にて後者（OR 4.4,  $p=0.006$ ）が同定された。
- 5) 膵石形成群では、ステロイド治療後も後遺的な①膵頭部腫大、②膵頭部の Wirsung 管と Santorini 管の両者狭細を認める症例が多かった。
- 6) ①膵頭部腫大、②膵頭部の Wirsung 管と Santorini 管の両者狭細膵が、膵全体の膵液うっ滞を生じ、長期経過で膵石形成を引き起こすと考えられた。
- 7) AIP の長期経過において、膵石非形成例に比べ、主膵管内膵石を認める高度な膵石形成例では、血清 Amylase 値および HbA1c 値の変化が目立つ傾向にあったが、有意な関連性は確認できなかった。

これらの結果より、AIP は長期経過で膵石形成を来す病態であることが明らかとなった。さらに、AIP の長期経過における膵石形成の危険因子として、①膵頭部腫大、②膵頭部の Wirsung 管と Santorini 管の両者狭細が同定され、これらは、膵頭部の膵管狭窄が膵全体に膵液うっ滞を生じさせ、膵石形成を引き起こすという機序が考えられた。本研究は、AIP の長期経過における膵石形成の実態ならびに機序の解明に寄与した。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。